

「今を修行する」

山口県 多門寺住職 佐々木大観

先日、私は「晋山式」と呼ばれる法要を勤め、正式に住職に任命されました。私がその「晋山式」の準備のため、仏具を磨いたり、香炉の灰を均したり、庭の掃除をしたり、法要の勉強や動きの確認をしていたときのことです。

ふと十年ほど前の、「安居」と呼ばれる修行生活を思いおこしました。「安居」とは、一定期間一つ所に集まって集団で修行をすることです。曹洞宗のお坊さんは、必ず「安居」をしなければ一人前にはなれません。一回の「安居」は九十日間、志を同じくした人たちと共同生活をします。年齢や育ってきた環境もまるで違う人ばかりの共同生活なので、心をつにすることは大変難しいことです。

この共同生活では、「群を抜けて益なし」とお経の中にあるように、誰かと比べて抜きん出てやろうとすると和を乱してしまいます。たとえば起床時、私の修行していたお寺では、朝四時に太鼓のドンツツという音で皆、一斉に目を覚まします。しかし、中には早く起きてしまう人もいます。その人がゴソゴソ音を立てれば周りの人を起こしてしまうので、静かに布団の中で太鼓の音を待ちます。食事と同様で、食べるのが早い人もいれば、遅い人もいます。自分が早いからといって、先に食べ終わって待っていると、まだ食べている人を急かしてしまいます。ですから、私たちは高齢の住職さまのペースに合わせて一緒に食べ終わります。

三ヶ月間、こうした生活の中での修行をして、お檀家さんの法事に行かせてもらえる様になりました。初めての法事で伺ったお檀家さんは、法事があるたびに、「経験の少ない若い方をお願いします。」とおっしゃり、その家の法事を通して、修行僧が成長していくことを喜びにされているようでした。

私も地元に戻り十数年が経ち、後輩のお坊さんが出来ました。私が「安居」の修行中育ててもらったお檀家さんのように、慈愛あふれる言葉がかけられているか、「安居」の修行中学んだ、互いに助け合いながら行動が出来るか、そんな事を思いおこしながらの「晋山式」の準備でした。お寺の場所は変わりましたが、修行は変わりません。今まで習った事を活かし、その状況に合わせてただこの一瞬一瞬を修行するだけです。